



パリでの気づきと大騒ぎ・電力業界とのなれそめ

Misao なぜ脱原発派になったのか、その経緯を伺いたいと思います。
古賀 1987年、経産省で独占禁止法を担当している産業組織課長をやった後に、パリのOECD経済協力開発機構に出向しました。そこでは金融と通信と電力の3つの自由化について議論をしていたんです。日本では金融と通信は自由化をやっていましたが、電力自由化の話は全然なかったので驚きました。ヨーロッパはもちろんアメリカも入って議論をしていて、日本だけが完全に遅っていました。

電力の独占をなんとかしないといけないと考え始めました。それで「OECD発送電分離を日本に勧告へ」という内容のレポートを読売新聞に出したんですが、「古賀を日本に戻せ」と大騒ぎになりました。東電の人がパリまで来て、「そんなこと(発送電分離)は日本ではできないんだ」とOECDの事務局を一生懸命オルグするわけ。次官へも電力会社や自民党の大蔵大臣や議員からの圧力がありました。これが私と電力業界との対立の始まりでした。

On The Road —Voice—

2012年3月から続く金曜官邸前抗議に参加する人たちの思いはさまざま。そのとき、どんな気持ちでいて、何を感じたのか、その声をご紹介します。



ここにいるというだけで圧力にはなっている。 自分みたいな人が10万人とか来ればすごいよね。

参加は3年前の2月頃、ロウソクをみんなで灯した頃からで、夏はけっこう来てるね、明るいから。仕事が終わってから無理のない程度で来てるよ。頭数の一人として、プラプラと人がいるだけで官邸には脅威になるし。そういうスタンスの人は僕の周りには多いよ。若い人もプラっと来れば良いのに。官邸前に来ること自分が意思表示だと思ってるよ。もちろん、ちょっと前に物見遊山で人が集まつた、それはそれで良いと思う。

あまり難しいことは分らないけど、3.11の暗い気持ちがあって、テレビとかは観なかった、デモとかに行くことによって気持ちを出すのも大事だなと思ってるよ。半分、義務みたいにした方が自分の場合にはいいかなと思っていて。ここにいるというだけで圧力にはなっている。総理が金曜日には家から出てこないっていうし。絶対そうでしょ、ドローンも飛んでくるし。

人々、原発には反対だったけれど、直接行動はしていないで負い目は感じていたよ。当日のニュースで原発のことを聞いた時には東京は終わりだな

2015年5月08日 50代男性・自営業

WEBサイト <http://coalitionagainstnukes.jp/interview/>に掲載したものから抜粋しました

拡げよう！脱原発の輪

NO NUKEs! human chains vol.01

ゲスト 古賀茂明

元経産官僚／改革はするが戦争はしない「フォーラム4」代表

聞き手：Misao Redwolf（首都圈反原発連合）



NO NUKEs! ENERGY AUTONOMY!

インタビュー全文はこちらでご覧いただけます
<http://coalitionagainstnukes.jp/?p=10725>



必ずまた波が来る——金曜官邸前抗議を続けることが大事

福島原発事故・脱原発の闘いの始まり

古賀 福島第一原発の事故が起きて、私は発送電分離と東電の破綻処理をしなければいけないという提言を書いて、人を介して民主党政権に届けたんです。提言は内閣官房長官の仙谷さんや国家戦略担当大臣の玄葉さんに上がって、一時はこれはいいじゃんと行きそうになったそなんですよ。でも、東電などの電力会社が圧力をかけてそれをひっくり返すわけです。そこからが、私の脱原発の本格的な闘いの始まりという感じですね。

民主党政権に対し公務員改革の批判をしたときは、経産省をやめろということにはならなかつたんですが、原発について声を上げたら、すぐにいられなくなりましたね。2011年9月の終わりに経産省を辞めたんですが、そのあと断るのが大変だというくらい仕事が来たんです。だからといってテレビに出るためにあまり変なことは言わないようにしようとか、そういうのは全然なくて。

I'm not ABE

Misao だから「I'm not ABE」なんですね。

古賀 みなさんは報道ステーションで、私がアレ(「I'm not ABE」のプラカード)を出したから降板させられたと思っているようですが、そうではなくて、辞めさせられるとわかつてから出しました。あの放送は2015年3月27日なんですが、「I'm not ABE」を世界中に発信しましょうと最初に言ったのは、1月23日

の報道ステーションなんですよ。

何でそう言ったかというと、後藤健二さんがISに捕まっているときに安倍さんが中東に行って、ISを支援する国に2億ドルを援助しますとバカなことを言った。後藤さんを殺すために言ったようなものです。間違ったメッセージが世界中に伝わるから「私たちは安倍さんとは違います」ということを世界に発信しないといけないと思ったんです。海外の人が見てもわかるように「英語で「I'm not ABE」のプラカードを掲げよう」と言ったら、菅官房長官が秘書を通じてテレ朝に圧力をかけてきました。

その圧力にテレ朝が負けて「出演は3月までです」と言ってきて、では最後にということでやつたんです。逆に言えば、その前の段階で「そんなことはもう言いません」と言ってうまくやろうと思えば、その後も出してもらえたかもしれませんね。でも、ぜんぜんそんなことは考えなかった。

脱原発運動へのメッセージ

Misao デモや抗議活動に参加している人たちにメッセージをお願いします。

古賀 今は参加者が少なくなっているかもしれないけど、必ずどこかでまた波が来ますから、あの場(金曜官邸前抗議)があれば、波がきたときに一気に盛り上がるんですよね。絶対に続けるというのが一番大事です。

もうひとつは、いかに仲間を増やすかということです。周囲の人たちの中にも、話を聞けば理解してくれる人が絶対にいるはずです。問題を知らないから反対していないという人もたくさんいるので、なんとかして聞いてもらうという努力。

ピラを押しつけたりとか一緒にデモに行こうよというのではなく、相手が拒否反応を示さないように巻き込んでいくという感じですね。大変なことだけど、一人がひとりの人を見つけると仲間が2倍になるわけです。倍々と増えていけば一気に仲間が増えていきます。

そのためには、自分自身が魅力的な人間になるということが大事かな。「あいつ変だよね」と敬遠されず、「あの人の話なら聞いてみようか」と思われるよう。媚びる必要は全然ないし、自分のスタイルは持っていた方がいいし、一目置かれる感じで少し変わった人物であってもいいけど、「あの人は何かいいよね」と思ってもらえるよう、人格形成を目指しましょう。私自身もそうしなくてはいけないなと思っています。



次回予告 NO NUKEs! human chains vol.02 (2018年6月号掲載)

このインタビュー・シリーズでは、ゲストのかたに次のゲストをご紹介いただきます。古賀茂明さんからは、城南信用金庫顧問、原発ゼロ・自然エネルギー推進連盟(原自連)会長の吉原毅さんをご紹介いただきました。

Walk and Talk it

7年という月日にどう思いをめぐらせるか——映画『原爆の子』



原爆ドームにいた猫

今年の3/11は、7年目の3/11でした。

新藤兼人監督の映画、『原爆の子』は広島に原爆が投下されたちょうど7年目、1952年8月6日に公開されました。当時広島に住んでいた「石川孝子」(乙羽信子)は家族の中で一人生き残り別の土地で小学校の教師をしていたが、原爆被災の頃に勤務していた幼稚園の園児達の近況について消息を確認するため数年ぶりに広島を訪れる、というストーリーです。映画では原爆投下から数年たち復興途中的広島の街が、被爆により亡くなる者、仕事に就けない者、一方ジェットスキーを楽しむ

若者達も映像化されています。

私たちがここで考えてしまうのは、7年という月日にどう思いをめぐらせるか、ということです。「7年も前のこと」にしたい人々は、確実に存在します。新藤兼人や乙羽信子はおそらく、そうさせたくなかった、そこに対抗したかった。「7年前」を終わったことにしないためのたたかいは、現在の、私たちのたたかいでもあるのです。(TH)



『決定版 原発の教科書』

津田大介・小嶋裕一／編 (新曜社・定価 2400円+税)

未曾有の事故後もなお、なんとしても生き延びようとする「原発」。それは本当に安全なのか? コストは安いのか? 廃棄物を一体どうする? そしてなぜ、私たち市民の多くはこれほどまでに「原発」を忘れないのか? —— 答えはすべてこの本にある。一からの基礎知識と、3E+S・廃炉・輸出・避難計画・核武装・交付金・原子力協定・倫理など各分野の第一人者の20の論考に加え、訴訟・風評被害と福島の分断・核融合発電などのコラム、小泉純一郎・泉田裕彦・マドセン・東浩紀インタビュー、もんじゅ君の漫画などによる、唯一無二の決定版教科書。



編集後記

「抗議の現場から情報発信を!」というコンセプトで、気持ちも新たに月間フライヤーを『NO NUKEs PRESS』と銘打ちリニューアルしました。ご愛顧のほどよろしくお願ひいたします。

3月11日、今年もこの日を迎えました。「金曜官邸前抗議」も7年目に突入します。始めた頃はこんなに長く続けるとは誰も思っていませんでしたが、「安倍政権が原発やめるまで続けるぞ!」という参加者の皆さんと心をひとつにし、まだ続けれます! 再稼働反対!!!!